

本論文は

世界経済評論 2019年 1/2月号

(2019年 1月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料
OFF

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店



競争と協調の源流を求めて ：ハンザ都市ハンブルクのイノベーション

外務省経済局政策課企画官 安部 憲明

本や人には、邂逅というものがある。

経済協力開発機構（OECD）の日本政府代表部で勤務した3年間、脳裏を去来して離れない三つの問いがあった。一つは、OECDは、グローバル化の功罪にどう対座すべきか？ということ。低くなった国境の垣根は、一層の自由化を通じて経済成長に資する一方、格差などの不公平、テロや金融犯罪という不正義をも助長する。「グローバルイノベーション」という単語が、諸悪の根源の如く反感を込めて酷使される昨今、政治的言説を離れ、実証的に実態を解明し、諸問題への処方箋を書くのは実に難しい。次は、OECDが牽引する国際的な競争と協調という、一見相反する原理を同時に追求する欧米の気質や土壌は何に由来するのか？ということ。OECD加盟に欧米の中小国が抱く熱意と、世界経済でより力量のあるアジア諸国の冷淡さとの好対照を前に抱く素朴な疑問だ。彼我の違いは、グレコ・ローマン的伝統、キリスト教的共同体思想、文明の進歩史観、それとも、何か他の遺伝子のせいだろうか。最後は、地方のイノベーションとは何か？という問いだ。OECDは、経済社会を個人と企業の単位に因数分解し、逆のベクトルでそれらを統合して国に政策提言し、その延長線上で国際協調の方策を論ずる。しかし、国家の単なる「微分」でも、個人や企業の「積分」でもない都市や地域という存在が、いかに自発的・内在的に革新を繰り返し、持続的に発展出来るのか。成長と分配、効率と平等、集中と分散という座標軸の中で、そこには独自の命

題があるはずだ。

パリの鉛色の空から枯葉を叩いて落ちる氷雨を避け、雨宿りした古本屋に、その本は突然現れた。『グローバル化する世界の変化を糧にして：ハンブルクからの視点（Capitalising on Change in a Globalising World: A View from Hamburg）』。著者は、ウォルガング・ミカスキー氏。経歴に元・OECD事務総長政策顧問、肩書にハンブルク自由都市駐仏大使、とある。2011年の暮れに出版された労作は、ハンザの中核都市が、大航海時代、産業革命、帝国主義時代、ドイツの二度の敗戦を経た現代のグローバル化の荒波で辛くも命脈を保ち、自己刷新を重ねてきた歴史をひも解く500頁もの大著だ。次の日から鞆に携えたこの本は、三つの問いの頭痛の代わりに、たちまち筋肉痛をもたらした。

グローバル化時代の勝因を紡ぐ OECD

著者は語る。グローバル化は、何も20世紀の新現象ではない。フェニキア人が地中海を遊弋した古代にも、人やモノ、技術や文化は共同体の枠を超えて交流した。この意味で、グローバル化は、ギリシャ諸都市の地中海沿岸への植民、ローマ帝国の版図拡大、ヴァイキングによる北欧の席捲、植民都市を連鎖したヴェニスの中継交易、ポルトガルとスペインの王室が地球儀をぐるりと回した大航海時代、海外雄飛のオランダ、産業革命揺籃の地イギリスが次々と覇権を握り、列強による植民地争奪戦の果ての世界大戦、米ソ冷戦下の

ブレトンウッズ体制という興亡を辿ってきた。著者は、「グローバル化論」は、単に歴史絵巻の描写に留まらず、各時代の活動主体間を律したルールやシステムの特徴、ダイナミズムの帰結を洞察し、現代への示唆を抽出して初めて意味を持つと喝破する。各時代の覇権国の影響力、活発な経済活動の前提である平和、商慣行、統治機構、通貨や為替、言語、規格や標準、そして海事法や取引法といったガバナンスの各種装置を比較分析し、今日の政策や経営に類推し役立てるべし。総じて、腐敗、低い教育水準、生産性の停滞、実物価値と乖離した通貨、不公平な税制、孤立政策、成長基盤のインフラの欠如、危機への脆弱性などは、敗因の総目録だ。負けに不思議の負けなし。こうして見ると、全員が敗者となった第2次大戦の欧州復興計画に「へその緒」を持つ OECD は、敗因の一つ一つに対応するが如く、貿易、投資、公共ガバナンス、科学技術、競争、金融、租税などの各種委員会で、グローバル化の営みをつぶさに点検し、勝利の方程式を紡いでいるのだ。

競争と協調：ハンザが転換したパラダイム

競争と協調は、ともに対等で差異のある自他の間で成立する。そして、この二律が反発せず両立する時、「円滑に競おう」（度量衡統一といった機会費用の削減）、「決まり事には俺も従うから、お前も従え」（商売敵の牽制）、さらに「おぬし、なかなかやるな」（切磋琢磨）と声を掛け合う関係が現れる。現代の国際経済ガバナンスの中で、一つ目の声は、為替や工業規格、税関手続の簡素化、二つ目は、生産調整や環境や労働基準等のルール、三つ目は、OECD でも、税制や教育等の分野毎に、各国が先行事例を報告し、教訓を共有するピア・ラーニングに制度化されている。

この対等者間の「健全な競争と協調の好循環」というパラダイムの源流は、グローバル化史のどこに発するのか。ギリシャやヴェニス植民網は、文化的ないし宗教的紐帯に基づく家父長的秩

序を旨とした。法典、ラテン語、街道等を上意下達で画一実施したローマの覇権システムは、隷下の主体が自発的な相互調整のメカニズム形成に向かうことを、統治効率の観点から許さなかった。

ハンザ（古ドイツ語で「同盟」の意）一。12世紀中葉、ドイツ北部、バルト海沿岸とロシア西部を往来する商人間の互助に端を発し、15世紀の最盛期で、大小700超もの都市が加入した緩やかなネットワークだ。その組織的特徴は、対等、任意、排他の3点にある。すなわち、構成都市は基本的に平等で、物事を全会一致で決めるが拘束力がなく、規範秩序は同輩間の圧力でかろうじて担保された。決議を守らない都市も多く、遠隔地の中小都市は総会を度々すっばかした。けれども、商務の便宜を図り、自身の競争力を鍛える良薬は進んで服用した。著者は、主権国家の全会一致を原則とし、同質な先進国が国際ルールや基準を作り、各国が、強制ではなく任意による実施を定期的に相互監視して協調を担保する OECD のシステムの萌芽はハンザにある、と指摘する。もっとも、著者の鼻根目にも、同盟はよそ者には排他的で、非ハンザとの合併禁止、輸送・回漕の独占など、護送船団方式で臨んだとも認める。15世紀後半の大航海時代以降の大西洋岸への交易の重心移動や、周辺国家の中央集権化に対抗した組織化の努力（1557年の連盟規約の採択や1630年の主要3都市間の防衛協商条約）は、構成都市の独立志向や同盟の柔軟性という強みを奪い、1669年の最期の総会后、ハンザは緩やかに消滅した。しかし、一蓮托生で衰退しなかった都市がある。

地方のイノベーション：成功の秘訣

ハンブルクは、歴史の研磨を生き抜いた教科書だ。2017年、ハンブルクに所在する国連海洋法裁判所に、外交官の駆け出し時代に薫陶を受けた柳井俊二判事（元駐米大使、外務次官）を訪ねた。国連旗が翻翻と春風を孕む小高い丘から、雪解け水を滔々とたたえるエルベ川の湾口と後背

地、エアバス社の工場と真新しい機体が行き交う滑走路、貨物港や造船ドックという欧州有数の物流拠点と産業技術集積地としての興隆が一望できた。初夏のG20首脳会議では、「インダストリー4.0」のいまを鮮やかに世界に訴えるだろう。

ハンブルクの成功の秘訣の第1は、自主独立の伝統だ。1210年、旧市街の職人と新興の商人・造船業者の利害調整を目的とした市議会の設立を皮切りに、15世紀初めに神聖ローマ皇帝が付与した自由都市の地位を維持した。通貨発行権は自治の生命線と見え、ライヒマルクの採用はドイツ帝国加入（1871年）の4年後だ。市庁舎外壁の「先人の勝ち取った自由を後世の人々が厳粛に守らんことを」という銘文は、市民と共にいまもある。ハンザ内の競争と協調を促すための、造船や回航、船荷などの規格や基準は重宝され、他の都市も加入し、海事法発展の基礎となった。

第2は、都市の開放性。外の血は、イノベーションの活力だ。スペイン占拠のアントワープを追われた英商人に定住権を与え（1566年）、オランダの新教派、スペインとポルトガルで排斥されたユダヤ人も避難してきた。異端や異教徒が手ずから持ち込む技術や情報、資本が集積し、金融が発達した。毛織物の生産加工者と取引業者が集い、仲介者はお払い箱。その実用的態度は、旧教の影響が強く移民に非寛容で、上流階級が新興勢力を抑えたりルーベックの守旧路線と対照的だ。

第3は、逆説的ながら、周辺としての立ち位置だ。13世紀前半には、グローバル化の熱源から離れて日陰にあった弱みを、足回りの速さや適応力という強みに変えた。兄貴分で潜在的競争相手のルーベックと、両市民の権利の相互承認、重罪規定の統一、共同出資に係る取極を通じ、南北の海を結ぶ陸路の安全を保障した（1241年）。大航海から植民地時代には、覇権国の周辺で、交易の重心や主要品目の変遷を敏感に嗅ぎ取り、主要取引品をビールから植民地産の砂糖やたばこ等の嗜好財に、貿易相手を欧州から新大陸の独立国へ

と次々に乗り換えた。また、開放政策をテコに主要国で確立されたノウハウを意欲的に取り込み、常に二番手ながら、毛織物業はじめ各時代の先端産業を育成し、「グローバルな」サプライチェーンを展開した。さらに、脇役ゆえに可能な、戦争や対立を避ける方針を堅持し、戦禍のリスクを分散・最小化した。ウェストファリア条約（1648年）の予備交渉の地となったのは、局外中立の真骨頂。勿論、いい時ばかりではない。算盤勘定に忠実な気風が災いし、大国の容喙を度々受けた。17世紀半ばの英蘭戦争では、中立違反の難癖をつけた英に仕方なく賠償した。1世紀後の七年戦争で、今度は、英の現金委託業者を仏住民の排撃から守った行為で、活況に湧く仏大西洋岸ポルドーとの取引を失った。ナポレオンのアムステルダム占領に機を見て対英貿易を独占したのも束の間、直後の大陸封鎖で貿易停止、仏の軍靴にまみれる辛酸を嘗めた（1810年）。

それでも、ハンブルクは、自主独立に発する任意性、実益最優先の開放性、周辺ゆえの適応力を発揮し、ことごとく敗因を退けてきた。生粋の地元人の著者がつけた「勝者の点数表」、すなわち、信頼できる政府と法令、教育の充実、規律ある労働力、安定した金融・為替政策（14世紀来の通貨同盟や証券取引所の創設（1558年）、公平な再分配、インフラ整備（早期の港湾舗装や灯台建設）、価値や富を自ら創り出す刷新、リスクを厭わない起業家精神と競争活性策といった多項目に関する丹念な検証は、本書に譲る。

OECDは、競争と協調というハンザ的流儀をまとい、公共政策を総動員し、グローバル化時代の地方のイノベーションという旧くて新しい課題に挑む。読後感を著者に送った封書は、宛先不明で戻ってきた。日々変わるグローバル化の諸相を洞察し、政策を磨くのは世代を跨ぐ駆伝だ、君の番を存分に走りなさい、そう受け取った。

（あべ・のりあき）